

Newsletter

CONTENTS

- 所長あいさつ Pg.1
- 第17回女性文化研究賞・研究奨励賞贈呈式ならびに記念講演 Pg.2
- 所員紹介〈第5回〉 Pg.3
- 第2回ジェンダーフォーラム報告 Pg.4

No.84

Summer, 2025



所長あいさつ

武川 恵子

来年5月に当研究所は設立40周年を迎えます。設立準備段階での資料を紐解くと、設立に向けた熱気が伝わってきます。

はじめに

文化とは、「人間が歴史の中で創り出してきた、生きるためのすべての構図」とだけ暫定的に定義しておく。(中略)

女性文化とは、これも暫定定義として、上記の「人間が」という箇所を「人間のうち、どちらかといえば女性が中心となって」と書き替えたものと記しておこう。(中略)

女性文化研究とは、(中略) 学問領域は、人文科学・社会科学・自然科学のすべてに及ぶであろう。研究対象の基盤は、人間(特に女性)の“生”(生きること)に存するのであるから、研究は(1) 歴史(あるいは形成・発展・変容の過程)の究明、(2) 現状の把握、(3) 未来の洞察・

ならびに“生”の意味・価値・目的・方途(生き方・暮らし方)の追求と探求という三方向に指向されるべきである。

(中略)

昭和女子大学は、「開講の詞」の一節にもあるように「思慮ある力強い婦人として、文化の道を歩み出す」ことを厳粛に宣言して65年、まっしぐらに突き進んできた自恃(セルフ・リライアンス)を有する大学である。(中略) いま、大学が“第3の出発”をするに当たって、「女性文化研究所」を開設することは、時宜を得たものである。この研究所は、昭和女子大学の根本理念を研究面において具体化しようとするものであり、女性の全生活場面・活動分野ならびに可能性を“新たな視点”から展望・発掘・開拓し、その成果を教育面にも反映させ、女性のより多様でより豊かな人生、さらに女性の幸福、ひいては全人類の幸福と平和に寄与しようとするものである。

(昭和60年10月21日学校法人昭和女子大学理事会資料より筆者抜粋)

今年10月15日には、当研究所設立40周年記念シンポジウムを開催し、これまでの活動を牽引されてきた先達や、外部の研究者も招き、設立の理念を踏まえつつこの40年の活動を振り返り、今後のあるべき活動を展望する機会とすることとしています。

(福祉社会・経営研究科特命教授・元内閣府男女共同参画局長)

第18回 昭和女子大学女性文化研究賞・女性文化研究奨励賞(坂東眞理子基金)〈募集予告〉

男女共同参画社会形成の推進と女性文化研究の発展に寄与する研究を対象とし、
男女を問わず趣旨にあった著作(単行本)に対し、授与するものです。

応募対象：2025年1月1日から12月31日までに出版され、日本語で著された単行本。

応募受付：2025年12月1日から2026年1月31日

◎要項・申込書はHPに11月掲載予定

第17回昭和女子大学女性文化研究賞・同奨励賞贈呈式

2025.6.3 (火)



選考委員長 坂東眞理子総長

昭和女子大学女性文化研究賞・奨励賞は、坂東眞理子本学総長寄贈の「坂東眞理子基金」を基に、男女共同参画社会形成と女性文化研究の発展に寄与する研究を対象として2008年に創設され、今回で17回目となる。

続く、吉田氏による特別記念講演「障害者ジェンダー統計の可能性：実態の可視化と課題の実証的解明をめざして」では、不利な社会的属性を複数持つと、複合差別を受けてしまう現実の变革の起点として、障害者統計にジェンダー視点を取り入れる必要性和重要性を強く訴えられた。



吉田仁美氏による特別記念講演

第17回女性文化研究賞(2024)は最終審査の結果、該当なしとなったが、卒業生を含む本学関係者に贈られる女性文化奨励賞は、日本大学文理学部教授、昭和女子大学女性文化研究所特別研究員の吉田仁美氏の『障害者ジェンダー統計の可能性：実態の可視化と課題の実証的解明をめざして』(法律文化社)に、2回目の奨励賞受賞となるため、特別奨励賞として贈呈された。



第17回女性文化研究特別奨励賞

第17回研究賞対象の単著は21点、奨励賞対象の単著は2点であった。研究賞は学内選考委員11名と学外選考委員の岡田恵子内閣府男女共同参画局長、大沢真理東京大学名誉教授による計13名、奨励賞は学内選考委員10名によって選考され、2月の学内選考委員会で選出し、4月16日の最終選考会で受賞を決定した。

障害者統計に関する先進主要国、アジア地域などの国際的な取り組みを余すことなく詳述した、本著書での日本における現状と活用への方途に関する考察と提言は、社会福祉学の研究にとどまらず、その教育においても、障害者ジェンダー統計分析の新たな方向性と挑戦の扉を開くものと期待している。

(文責：シム チュンキャット 女性文化研究所所員・選考委員)

贈呈式では冒頭、坂東総長・選考委員長からの挨拶と審査経緯が述べられた。続いてシム チュンキャット選考委員の特別奨励賞の選考報告後、贈呈書と副賞が坂東選考委員長から吉田氏に手交された。



受賞者と選考委員



坂東選考委員長から吉田仁美氏への贈呈

贈呈式・特別記念講演 参加者：45名
※詳細は女性文化研究所紀要第53号(2026.3)に掲載予定

女性文化研究所 所員紹介 〈第5回〉

「ジェンダー研究との出会い」

川畑 由美

ジェンダー研究に興味を持つようになったきっかけは、修士論文で扱ったF. Scott Fitzgeraldの作品に登場する「フラッパー」と呼ばれる女性たちに関心を抱いたことだった。アメリカでは1920年に女性参政権が成立し、第1次世界大戦を経て女性の社会進出も進展した。しかし、1920年代のアメリカ社会を描いたFitzgeraldの作品に登場するフラッパーたちは、一見自由で進歩的に見えるものの、実際には浅薄で、真に自立した存在とは言い難い描かれ方をしている。彼女たちは19世紀のビクトリア朝的価値観からは解放されたが、自由奔放な振る舞いの裏には葛藤が潜み、結婚後の家庭生活に満足できず精神的に不安定となる例も多く、社会的な自立を志す者は少なかった。



その後、文学作品をフェミニズムの視点から読み直す批評に触れる中で、Judith FetterleyやElaine Showalterといった批評家たちが、これまで「正典（キャンオン）」とされてきた文学を新たな視点で捉え直す手法を展開していることを知った。大学時代に学んだアメリカ文学の枠組みとはまったく異なる

世界がそこにはあり、大きな衝撃を受けたのを今でも覚えている。また、bell hooksの著作を通しては、マイノリティの視点を取り入れたフェミニズムの多様性や、白人中産階級の女性とは異なる経験の重要性を理解することができた。

女性文化研究所の所員となってからは、文学以外の分野でジェンダーを研究する他の所員との交流を通じて、多様な視点からの刺激を受けている。特に、女性文化研究賞の授賞式や坂東フェローシップの研究発表に参加することで、幅広い研究成果に触れ、自身の関心領域を拡張することができた。今後は、これまでの文学研究を基盤としながら、多文化・多言語環境におけるフェミニズムの展開や、交差性（intersectionality）の視点を意識した研究を模索していきたい。

（文学研究科教授・国際学部長・女性文化研究所所員）

「女性文化研究所とのお縁と展開」

北本 佳子

女性文化研究所とは、女性文化研究叢書第10集『女性とキャリア』（2016年2月）に「福祉を学ぶ女子学生のリーダーシップ育成に向けて」を私と若林功助教（当時）で執筆させて頂いたことがご縁の始まりです。福祉社会学科長をしていた私が「福祉社会の実現に向けた女性リーダー育成プロジェクト」というテーマで、大学プロジェクト予算の採択を受けて実施した成果の一部でした。

このプロジェクトでは、本学の全学生を対象としたリーダーシップに関するアンケート調査と福祉分野で活躍する女性リーダーへのインタビュー調査を行い、それを踏まえた成果報告会（シンポジウム）の開催と報告書の作成をしましたが、その中のアンケート調査結果を論文として再構成したのが、上記の論文です。

その後も、同叢書第11集『ダイバーシティと女性』（2019年2月）では「福祉現場におけるダイバーシティ・マネジメントとリーダーシップ：先進事例からの考察」を、第12集『女性リーダー育成への挑戦：昭和女子大学創立100周年記念出版』では今井章子所員との共著で「女性リーダーのキャリア形成から見たセルフ・リーダーシップの研究：新たな教育プログラムへの示唆」を、第13集『コロナ禍の労働・生活とジェンダー』では「エッセンシャルワークを担う福祉従事者に関する研究：全国社会福祉法人経営者協議会役員へのインタビュー調査から」を、第14集『北京行動綱領から30年：達成された成果と残された課題』では「子どもを産み・育てることの意思決定に関する研究：特別養子縁組の養親に焦点を当てて」を執筆させて頂き、今日までご縁がつながっています。特に第13集と第14集は副所長として編集にもかかわるというありがたい機会を頂きました。

さらに、ジェンダーに絡むご縁は学外にも展開し、2021年より公益社団法人全国老人福祉施設協議会の理事を拝命するとともに、昨年度はその中の女性キャリアアップ推進部会（令和7年度より女性キャリアアップ推進委員会）による女性のキャリアアップに関する意識調査の結果に関して、推進部会メンバーの方と討議をし、同会の月刊誌の連載（3回）をさせて頂きました。福祉の分野は女性の就業者が多いのですが、ジェンダー平等という点では、多様な課題があります。今後も研究・教育という立場から、微力ながら貢献ができればと思っています。

（生活機構研究科教授・女性文化研究所副所長）

女性文化研究所シンポジウム

2025年3月27日（木）15：00～17：00
@ Zoom ミーティング

女性文化研究所ジェンダーフォーラム第2弾
「ジェンダー視点で学ぶ
—高校生とともに大学教員に挑もう！」

【開会挨拶】 金尾 朗（昭和女子大学学長）

【日本大学豊山女子高校LADYプログラム+A特進クラスの
在校生の皆さんの研究テーマを紹介！

同高校出身の葛西薫子さん（昭和女子大学福祉社会学科4年）

【オープニングメッセージ・総括】

坂東真理子（昭和女子大学総長）

【フォーラム】研究・授業紹介／発表

コーディネーター 北本佳子（女性文化研究所副所長）

1. 日本語日本文学科 福田委千代准教授（所員）
「少女小説とその周辺—少女たちの『物語』—」

2. 現代教養学科 木村美也子教授（所員）
「不平等と健康、そして私たちの『生きる力』」

3. 管理栄養学科 林真理子准教授
「生命科学とデータサイエンス」

トークセッション・質疑応答・全体総括

総合司会：武川恵子（女性文化研究所長）

今回第2弾として、自立した女性を育むハーバード大学発「LADYプログラム」を2017年から導入している日本大学豊山女子高等学校の生徒さんらとともに、現代のジェンダーや女性を取り巻く環境や課題、過去・未来への関心を深め考えるシンポジウムを実施した。

金尾学長の挨拶、坂東総長のオープニングメッセージを受け、本学ジェンダー関連授業や研究の中から紹介された各テーマに対し、生徒さんらとのトークセッションを行うことで、ジェンダー問題は、女性だけの問題ではなく、様々な年代、分野にまたがる問題であることを若い世代にも認識され、登壇者にとっても充実した討議となった。

事後アンケートには、「それぞれ違った観点から女性を見ていて興味深かった」、「ストレス対処力（sense of coherence: SOC）と受援力というスキルは、これからの生き方、働き方で備えたい力」、「入試女子枠を差別とせず、女性を含む弱者への支援を胸をはって説く社会へ」との声が寄せられた。

※ Zoom 参加 77 名（登壇者・所員等を含む）、アンケート回答 29 名



女性文化研究所設立40周年記念公開シンポジウム〈予告〉
北京+30の現在、「女性文化」を問う

2025年10月15日（水）17：00～19：00〈ハイレックス開催〉

昭和女子大学学園本部館3階大会議室（先着100名）またはZoomどちらかでお申込みください。

間もなく
申込〆切

基調講演 北京+30の現在、「女性文化」を問う

伊藤 セツ 昭和女子大学名誉教授／女性文化研究所第5代所長

パネルディスカッション

坂東 真理子 昭和女子大学総長／女性文化研究所第6代所長

粕谷 美砂子 昭和女子大学大学院福祉社会・経営研究科教授／女性文化研究所運営委員

小西 香苗 昭和女子大学大学院生活機構研究科准教授／女性文化研究所所員

鈴木 正崇 慶應義塾大学名誉教授／第14回（2021）昭和女子大学女性文化研究賞受賞

伊藤 セツ 基調講演者

趣旨説明：武川 恵子 昭和女子大学大学院福祉社会・経営研究科特命教授／女性文化研究所長

司会進行：伊藤 純 昭和女子大学大学院生活機構研究科教授／女性文化研究所運営委員

対面申込
10/6 月 正午まで



Zoom 申込
10/9 木 正午まで



Newsletter No.84 (30,Sep,2025)

昭和女子大学女性文化研究所

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7-57

Tel: 03-3411-5096 Fax: 03-3411-5284 E-mail: jobunken@swu.ac.jp

https://content.swu.ac.jp/jyobunken-blog/

発行人：武川 恵子

編集委員：武川恵子、北本佳子、高橋薫、野崎茉莉 編集事務：土館優子

